

本論文は

# 世界経済評論 2019年9/10月号

(2019年9月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論

# 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

# 6,600円

税込

17%

送料  
無料  
OFF



定期購読  
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

# デジタル版バックナンバー読み放題!!



## 世界経済評論 定期購読



# ☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

今年の5月中旬ドリス・デイ (Doris Day) が97歳で亡くなった。この歌手にして映画女優は戦後の占領時代に育ったぼくには懐かしい。その明るい歌声はバツと開いた笑顔とともに、当時の理想「アメリカ」をそのまま具現した。

いつだったか、このドリス・デイには全く異なる側面があったのか！と慌てたことがあった。ドロシー・デイ (Dorothy Day) と混同したのだ。このキリスト教平和主義者は、ローマ教皇フランシスが模範的アメリカ人としてエイブラハム・リンカーン、マーティン・ルーサー・キング、トマス・マートンとともに挙げたほどだった人なのに、ぼくは長いこと知らなかった。

ぼくがアメリカに来た1960年代の終わりは反ベトナム戦争運動の高まりの最中だったが、ほどなく反戦運動で目についた人にダニエル・ベリガン、フィリップ・ベリガン兄弟がいた。ともにカトリック (イエズス会) 神父で、兄のダニエルが詩人だったためだろう。今見ると、ダニエルは「ドロシー・デイに捧げる」Zen Poemを1977年雑誌に出している。しかし、ぼくがこのデイを知ったのは週刊誌 The New Yorker の「Break-in at Y-12」という長い記事を読んだ時だろう。日付は2015年3月1日号、とすればわずか4年前だった。

### 核兵器を農具に

Y-12は、第二次大戦中、広島、長崎の原爆を造ったマンハッタン・プロジェクトで製造された濃縮ウランを指す暗号で、以後その製造所はY-12 National Security Complexと呼ばれている。The New Yorkerの記事は、2012年7月28日、3人の反核運動家がこのビルに「不法侵入」したことを述べ、それに絡めて、1980年ベリガン兄弟など8名が始めたPlowshares反核運動などを

詳しく述べる。この運動の原動力となったのがドロシー・デイだった。

Plowshares (鋤) は、聖書「イザヤ書」第2章の「かれらはその劔をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし、国は国にむかひて劔をあげず」からきており、「鋤運動」に加わる人たちは核爆弾製造所や核兵器の設置場所に入って反対を明示する。ただし侵入と言っても、建物に爆弾をかけたり、弾道ミサイルなどの核兵器を破損したり盗んだりするのが目的ではない。彼らにはそれだけの力がない。

たとえば2012年7月Y-12ビルに侵入した3人を見てみよう。一人は住宅塗装業をやりながらホームレスの手伝いをする60歳近いキリスト教平和主義者Gregory Boertje-Obed、一人はMichael Walliという名の、アッシジの聖フランシスを自分の規範として慎ましい生活をしながら貧困者に奉仕する60歳台のキリスト教平信者 (layman)、残りの一人は精霊の子会 (Society of the Holy Child) の82歳になるMegan Riceという名の尼さんだった。この尼さんは年齢にしてはかく 矍鑠しよくとしていて心臓病を抱えている、と記事を書いたEric Schlosserは述べる。

では、不法侵入をして何をするのか。通常、「無辜の人たちの死を象徴する」血を散らして何らかの言葉を残す。Y-12侵入の場合、血は「鋤運動」の活動家として何度も入獄したTom Lewisという人が4年前死んだ時に腕から採って保存していたものだった。スプレーでは、大きく黒く「戦争ならず平和を目指せ」「正義の果実は平和」などと書き、また、赤く「血の帝国に災いを」などと書いた。

### 貧困生活の誓い

ドロシー・デイは1897年ブルックリンで生ま

れた。両親は保守的だったがあまり宗教的ではなかったらしい。しかし、ドロシーは小さい時から困った人たちに献身する活動に引かれ、聖書を読み、大学を中退してグリニッチ・ヴィレッジに住み始めると初めから社会運動に身を投じた。「アカ」すなわち急進主義者、平和主義者、またボヘミアンたちの一人になった。社会主義新聞 The Call の記者になり、左翼雑誌 Masses の副編集人になり、レオン・トロツキーをインタビューし、女性参政権のためにホワイトハウス前でデモに加わって逮捕されて1カ月投獄された。女性に投票権を認める憲法修正第19章が成立したのは1920年だった。

また『世界を揺るがした十日間』の著者ジョン・リードを友とし、劇作家ユージーン・オニールや作家ジョン・ドス・パソスなどの無政府主義者、共産主義者と夜遅くまで酒を飲んだ。売春容疑で逮捕され、レストランのレジ係、図書館員、画家のモデル、あるいは看護婦として働いた。その点、去年、民主党の重鎮ジョー・クローリーを打倒してブロンクスを含む選挙地区から下院議員初当選を成し遂げた弱冠29歳のアレクサンドリア・オカシオ・コルテスに似ているが、ドロシー・デイは政治家にはならず、1927年、結婚しないままに娘を出産した年、改心してカトリシズムに転じた。両親ともに宗派はEpiscopalian（聖公会）だったからプロテスタントで、この宗派替えは、当時は急進的な友達ですらあっと驚かせたという。しかも、このカトリシズムは「新アメリカ・カトリシズム」と呼ばれ、終生貧困生活を誓い、ホームレスに献身し、国家権力に反し、あらゆる形態の暴力と戦争に反対するものであった。

### 妥協を認めぬ平和主義

ドロシー・デイは1933年、マンハッタンで

Catholic Worker を創刊、この月刊誌は1部1ペニーで売った。これは今でも1部1ペニーで売っているという。今度手にしてみようと思う。

ドロシー・デイの平和主義は妥協を認めない。ナチ主義が猖獗する時にも外部から戦争を仕掛けることに反対し、アメリカが日本に原爆投下したことには「無辜な人たちの膨大な殺戮」として批判した。

1965年、ベトナム戦争が拡大、ジョンソン大統領が3月には海兵隊員3,500人を南ベトナムに送り込み、年の終わりには国防省は派遣兵数は40万人が必要と公表したが、5月にはカリフォルニア大学パークリー校で60名が徴兵カードを燃やした。Catholic Worker 会員はNew Yorkでこれに応じ、デイは11月6日、Union Squareの集会で若者に対して徴兵カードを燃やすよう呼びかけた。

「鋤」運動に戻ると、2018年4月4日、世界最大の潜水艦基地であるノースカロライナ州Kings Bayで反核運動を実施しようとした7名が逮捕された。これに対する禁固罰は最高25年に達する可能性もあるという。今年4月28日の「鋤」運動の公表によると、この告訴を免訴するようにとの申請は却下された。これを週刊誌The Nationなどに報じたFrida Berriganはフィリップ・ベリガンの娘で、78歳になる母のElizabeth McAlisterは、もう一人とともに刑務所に入られている。父と母は結婚27年のうち合計11年を刑務所で過ごした。

Y-12のミーガン・ライス尼は3年間投獄された。出獄すると85歳、「これからも反核運動を続けます」と述べた。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY